

第 21 話<日向の銀山>の要約と参考資料

第 21 話<日向の銀山>の要約

中世に佐藤道元、江戸初期に守田三弥、江戸後期に延岡藩、昭和 10 年代に岩戸鉱山会社が関係した地域は、古祖母の山腹・山麓一帯にまたがっていました。三弥が経営して大富豪になった「日向の銀山」は、この一帯広がる鉱山を総称していたのではないのでしょうか。

第 21 話<日向の銀山>の参考資料

2 1 - 1 「山弥時代の土呂久」にみる外録銀山の範囲

山口保明「山弥時代の土呂久」（「鉱脈 11 号」；1996 年 2 月）

一番舗（一番山）が何処であったか、現在は不明であるが、ここに一つ興味深い文書があり、「同（註・元和）5 年巳未 8 月ヨリ、山裏ノ内登尾ト申所ニ銀山出来候。町家数二千間（註・軒）有テ人数ハ諸極集リ何程トモ」とある。元和 5 年（1619）は山弥齢にすれば、36 歳にあたる。ここも後代まで掘り継がれるのであるが、或いはこれが一番舗に相当するのかもしれない。（P12）

また「旧坑」を「山弥坑」とか呼んだりしているが、領有形態を知る上に、それら諸伝承の中でも興味を引くのは、「公床千床」「私床千床」とともに、現在の紫金原と道元越との間に山弥自身の持ち山をつくり、今もそれを「囲い山坑」と称している。（P13）

もっとも発見者や、その山の開坑に当たった者の名を以て、坑道の名としたものは多く、古祖母山頂への七合目あたりにある「勘蔵舗」の話は、よく知られている。これは年代が新しく、明治 20 年代のことであり、主坑道を竪に掘り下り、その主坑道に向かって、各所から風穴を兼ねて掘り迫まる、いわゆる「尺八掘り」という採掘方法であったという。（略）この他に茂兵衛舗とか、彦兵衛舗とかが近隣にあり、土呂久の鶴亀坑なども、よく知られているものである。（P17）

この地域の鉱山をみると、日平銅山・見立錫山・黒葛原銀鉛山・大吹山鉛山等、その鉱質は極めて雑多である。土呂久自体も正しくは、銀鉛山とみるべきである。（P20）

2 1 - 2 山裏村の銀山

甲斐岨常著「高千穂村々探訪」

黒葛原、秋元、西之内、登尾を総称して日向ひなたと言っているが、ここは古くから土呂久と共に鉱山開発の行われた地区で登尾の萱野鉱山、黒葛原鉱山は江戸の初期から開発され、中でも萱野鉱山は徳川時代に盛んに採掘され三ツ合はその中心市街をなしていた。桑之内の庄屋の記録に「登尾銀山、戸二千軒」とある。今でも地名に上町、上町谷など

の地名が残っている。現在の矢野氏は当時の酒屋あとであり、その下の抽子木谷川、三本松川、本谷川の合流する、所謂三つ合の三角州には石積の段々に屋敷跡があり、二千軒まではなくとも鉾山町の跡歴然としている。土地の人が代官屋敷跡と称する所は、おそらく銀山奉行の屋敷ではないかと思われるが、或は三本松関所の役宅かも知れない。女郎墓などもあり最盛時のにぎやかさが思われる。当然寺もあり三つ合の少し上方に浄光寺あとがある。永享元年（1429）建立というので或は鉾山以前から山裏村（見立を含んだ）の寺かもしれない。（P167~168）

黒葛原に鉾山跡が数か所あり、現在のバス停附近を昔、町とっていたそうで繁昌したものであろう。村中に堂屋敷、寺屋敷という地名がある。（P171）

浄光寺（高千穂町史 P763）

無辺山浄光寺（浄土真宗） 高千穂町大字下野 671 番地

（一）沿革

当山は、釈明覚（鎌倉権五郎景政の末孫）の開基で、永享元年（1429年）岩戸山裏に建立され、登尾銀山浄光寺と称されていた。（略）慶安元年（1648年）に山裏から大字下野高野平延命庵跡に移転した。この移転は、当時山裏に在った三愛鉾山の閉山に因る離職者の転居に伴うものと云われるが、真偽の程は明らかでない。

（二）歴代住職

二代 一道明党 宝徳元年（1449年）登尾鉾山浄光寺と寺号御免

21-3 天正18年竿前御改書上帳（西臼杵支庁編『西臼杵百年史』P32~34より）

高千穂の村数

高千穂地方の検地は、秀吉の九州征伐のとき黒田勘兵衛に命じて竿入れ（測量のことを竿入れといった）を行ったようで、五ヶ所の矢津田家文書の中に「天正18年竿前御改書上帳」があり、当時の各村の石高を知ることができる。それによると、（略）

- 一、高四百拾石壺斗一升六合は 岩戸
- 一、同拾四石七斗九合は 土路久
- 一、同百貳石五斗八升六合は 山裏
- 一、同貳拾貳石九斗八合は 登尾

（略）とあって、高千穂の総石高が、6,140石余で、これが後の延岡藩の、5万3千石の基礎石高になったようである。（P34）

この「高知尾」の石高表で注意を引くのは、高千穂の村数が、舟の尾以下23か村であるということである。このうち後世の村名にならないのは、舟の尾・鹿川・宮水・土呂久・登尾・松ノ平であるが、これはこの当時、一つの村をなすほどの人口があったものと思われる。土呂久にしても登尾にしても、現在は一つの隣組程度の人口であるけれど

も、当時は鉾山が盛んになり始めたところで、登尾、土呂久は鉾山が開かれて人口が相当あったものと思われる。(P34)

21-4 三本松口屋番所が管轄した鉾山

日之影町史7 史料編4「内藤家文書」 P156~157より

高千穂諸銀山、当時相稼居候分、岩戸村外録銀山柄実吹土持寛次吹屋式ケ所有之、内壺ケ所外録吹谷、壺ケ所東岸寺門之内岩本、ノ式ケ所、同門外録本谷山奥くくる石江、山崎純造仕掛未夕吹屋無之、山裏村之内黒葛原柄実吹、豊後中村安次郎吹屋壺ケ所、登尾本谷筋柄実百姓願から世話府内竹屋喜兵衛吹屋、秋元門谷下本川添江壺ケ所、重内山江錫鉛戸高悦五郎、乙ケ淵江壺ケ所、見立山江錫山馬場理平次吹屋壺ケ所、大福山江川内屋幸右衛門跡平原門要蔵錫鉛、太田代四郎下世話吹屋壺ケ所、加賀津ケ平江錫鉛柄実吹屋壺ケ所、ノ七ケ所吹屋有之、且々相稼居候、右吹立之節者山裏村之内、三本松口屋番所、当所定番三好栄右衛門立会见届、右錫鉛出来高之拾歩一品にて取納、山林方役所江、村継送相納、其余稼人江売買差免、津出御番所江、無口銀通送差出来候処、去年ヨリ右吹立之拾歩一、三本松御番所ニ而、取立納来候、外者、灰吹銀入用之方江、一手買入仕候ニ付、土持靈太郎・同苗四郎吉掛合被仰付精々罷在候処、右銀にて、御損失不少儀ニ付、此節丸々被差止方、可然旨御相談之趣承知仕候、以後諸金山吹立之錫鉛共、是迄買入之銘目据置、土持靈太郎兄弟江、為差働歩一取立之分共、銀山方にて一式御買上被成候ハ、一統為筋ニも相成、幾々盛山仕候ハ、御国益増ニ相成候付、其通御取計被下度事

但 錫鉛歩一取立之分、銀山方江御買上相成候ニ付、右代銀之儀者、大坂為御登仕切銀相場を以差引可申事

(略)

一、当時相稼居候金山場所付左之通

岩戸村之内外録并青毛ノ二ケ所 錫鉛 土持寛次願

右同村同門之内くくる石山杉松谷 錫鉛 三ケ所村 山崎純造願

山裏村之内中村門かかつケ平外塚吐ヨリ錫鉛柄実吹 山裏村之内中村門百姓中

右同村之内大福山 錫鉛 恒富村之内平原門要蔵願 当時山方主取 太田代四郎

右同村之内黒葛原 錫鉛 豊後千才 安次郎

右同村之内重内山 錫 乙ケ淵 戸高悦五郎

右同村之内見立山 錫 馬場理平次

右同村之内登尾門 錫鉛 右同村百姓中 当時豊後竹屋喜兵衛

ノ八ケ所

右之通御座候、以上

(嘉永五年) 五月 山林方